

G.ロッシーニ(1792-1868)

弦楽のためのソナタ 第4番 変ロ長調

数々の成功作によって、オペラ作曲家としての名声をほしいままにしたロッシーニは、モーツァルトにも並ぶ早熟の天才だった。今日ロッシーニのもっとも有名な器楽作品として知られるこの<弦楽のためのソナタ>は、ロッシーニ12歳の時に作曲されたものである。あふれ出るメロディーを自在に操る完成度の高さは、12歳の少年の作としては音楽史上きわめて稀な例といわれている。オペラを作曲する際には、注文主であるオペラ劇場のレヴェルや聴衆の趣味に合わせて卓越した職人技を発揮したロッシーニの資質が、この最初の器楽曲にもよく表れている。ヴァイオリン2、チェロ、コントラバスという変則的な編成を見事に生かしたユニークな音楽となっているのである。

第1楽章アレグロ・ヴィヴァーチェ

第2楽章アンダンテ

第3楽章アレグレット

J.S.バッハ(1685-1750)

3つのヴァイオリンのための協奏曲 二長調 BWV1064a

宮廷音楽家としてワイマールやケーテンに赴任したのち、1723年からライプツィヒで聖トーマス教会のカントールを務めたバッハは、カントールの公務と並行して、市民の演奏団体「コレギウム・ムジクム」の指導者を務めていた。その演奏活動の中で、自身が演奏し指揮する目的で書かれたのが14曲のチェンバロ協奏曲であるが、これらはいずれも旧作のヴァイオリンやオーボエなどのための協奏曲を編曲したものであることがわかっている。今回演奏される<3つのヴァイオリンのための協奏曲>は、<3台のチェンバロのための協奏曲ハ長調> BWV.1064の原曲として復元されたもので、創意に満ちた精緻な対位法がバッハならではの傑作。3人のソロが全く対等に、時には競い合い、時には一体となって音楽を進めてゆく。

第1楽章アレグロ

第2楽章アダージョ

第3楽章アレグロ

W.A.モーツァルト(1756-1791)

交響曲 第40番 ト短調 K.550

モーツァルトに短調の作品は数少ないが、それらはどれも、ほとんど例外なく傑作に属している。交響曲でいえば、<第25番>とこの<第40番>の2曲。いずれもト短調であるところから、前者を「小ト短調」、後者を「大ト短調」と呼ぶこともある。<第40番>はモーツァルトが死の3年前に作曲した最後の「三大交響曲」の一曲として、晩年の悲劇を余儀なくされた天才が残した至高の音楽といえるものである。劇的な緊張と憂いに満ちた情調が色濃く支配するその音楽はまた、完璧な調和が成し遂げられていることでも称賛される。シュ

ーマンはこの交響曲を「ギリシャ風にたゆとう優美さ」と評し、その音楽が、世俗的な感傷を包み込みつつもきわめて浄化された世界に属していることを称えた。

第1楽章モルト・アレグロ。「ため息」の主題の対位法的展開は、激しいパトスを漲らせながらも、あくまで美しい。

第2楽章アンダンテは、慰めに満ちた音楽が、繊細な書法で綴られる。

第3楽章アレグレットは、劇的な趣きをもつこの交響曲ならではの独創的なメヌエット。

第4楽章アレグロ・アッサイは、聴くものを圧倒するドラマティックな音楽。その書法はきわめて大胆かつ緻密である。

J.スーク(1874-1935)

弦楽セレナード 変ホ長調 Op.6

弦楽セレナードといえば、チャイコフスキーやドヴォルザークの作品が有名だが、このスークの作品も隠れた名曲として知られている。ブラハ音楽院でドヴォルザークの高弟の一人として教えを受け、のちにその娘婿ともなったヨゼフ・スークは、文字通りドヴォルザークの後継者としてチェコを代表する作曲家の一人である。若い頃、有名なボヘミア弦楽四重奏団のヴァイオリン奏者としても活躍したスークは、弦楽器の魅力を生かした作品に定評があり、10代ですでに代表作となる作品をいくつか残している。この<弦楽セレナード>もそんな一曲で、1892年、スーク18歳の時に作曲された。

ブラハ近郊の村ヴィソカーにあるドヴォルザークの別荘にも度々招かれたスークは、18歳の夏にそこでのちに妻となるドヴォルザークの娘オティリエと出会う。そしてこの出会いこそが、<弦楽セレナード>作曲のきっかけとなったのだった。初々しい14歳の乙女の印象と彼女への思いが、詩的でロマンティックな楽想となって、この作品にはすみずみにまで染みわたっている。

第1楽章アンダンテ・コン・モートは、中間部にスラヴ的な優美な主題を配した叙情的な楽章。

第2楽章アレグロ・マ・ノン・トロppo・エ・グラツィオーソは、軽やかなワルツ風の楽想を中心に三部形式で構成される。

第3楽章アダージョは、内省的な夜想曲風の緩徐楽章。チェコのソロや、頻繁に出てくるピッツィカートが効果を上げる。

第4楽章アレグロ・ジョコーソ・マ・ノン・トロppo・プレストは、輝かしく軽快なフィナーレ。チェコの民族色が色濃い楽章で、最後は第1楽章の主題が回想されて曲を閉じる。

曲目解説／柿沼唯(作曲家)